



日本保育学会公式シンボルマーク

日本保育学会会報

JAPAN SOCIETY of RESEARCH on EARLY CHILDHOOD CARE and EDUCATION

●第157号●

2013年9月1日 発行
編集・発行 一般社団法人
日本保育学会
編集責任者 中坪史典
〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-2 B, Rプロジェクト1
Tel 03-3234-1410 Fax 03-3234-1414
http://jsrec.or.jp

●特集●

第66回大会レポート (於：中村学園大学)

「未来を育む」——今回の特集は、成功裡に終わった第66回大会の報告である。大会実行委員長の感謝の言葉とともに、5名のレポーターの記事が掲載されている。「子どもの遊びを育む」「家族との関わりを育む」「実践を『開く』ことを育む」「保育者の実践研究を育む」「実践の豊かさを育む」…各レポーターのルポからは、子どもの未来を育み、保育の未来を育むことにつながるキー概念を読み取ることができる。

第66回大会を終えて

第66回大会実行委員長 笠原 正洋

日本保育学会第66回大会は、中村学園大学・同短期大学部キャンパスをメイン会場として、2013年5月11日(土)・12日(日)に開催されました。なお大会前日の10日(金)には、付属あさひ幼稚園・吉岐幼稚園・おひさま保育園での公開保育ならびに保育者研修ワークショップを催しております。

今回、九州・沖縄ブロックの実行委員会が大会開催の任にあたりました。九州・沖縄地区での開催は20年ぶりであり、参加者が集まるかどうか危惧しておりましたが、皆様のご協力により、予約参加者1,543名、当日参加として、会員422名、一般・非会員201名、九州・沖縄在住の保育関係者504名、学生138名と、2,800名を超える方々にご参加いただき、盛会裡に終えることができました。厚く感謝申し上げます。

今大会のテーマは、「未来を育む」です。このテーマに基づいて、SOS子どもの村福岡の前村長である坂本雅子先生に「すべての子どもに愛ある家庭を～子どもの村福岡の取り組みから～」について講演をいただきました。その後、ポスター発表525件、口頭・ビデオ実践研究発表304件、自主シンポジウム28件、この他にも学会企画のワークショップやシンポジウムが6本、また実行委員会の企画による特別講演、シンポジウム、保育セミナーが開かれ、中村学園キャンパス内の体育館や多くの教室を使っでの発表となりました。

た。闊達な意見も交わされ、会場に入りきれないほどの会員が集まったシンポジウムや分科会もありました。座席・配布資料不足等、一部の会員の皆様にはご迷惑をおかけしましたが、大きなトラブルもなく大会プログラムを終えることができました。皆様のご協力とご尽力に心より感謝申し上げます。

ただ大会を運営するにあたり、今後さらなる検討が必要な事項もいくつか見えてきました。ブロックによる大会開催の在り方、ウェブによる予約参加申込・発表原稿受付システムの問題、近年の情報機器の発展に伴う多様な機器持込の是非等に関することです。

たとえば、ブロック毎に大会を開催することは、主催校が単独で開催するよりも、確かに多くの資源を活用でき、協力も得られ、大会を契機としてその地区の日本保育学会会員同士のネットワークがより密になり学術研究の活性化につながると予想されます。しかし、今大会の実行委員会がその意義を達成できたかどうかは大いに反省するところがあります。

また、次回大会からは、予約参加登録・発表原稿受付の手続きはすべてウェブを通して行われる予定です。今回、会員の皆様のご協力により、約85%の原稿をウェブから登録いただきましたが、登録手続きの完了が周知されていなかったという問題があり、その確認作業のため要旨集とDVDの発送が遅れる事態となりました。今後は、より効率的なシステムの導入、会員の皆様にその手続きを周知する取組の徹底、そして会員の皆様の自己責任のもとに登録と原稿送付を行うという仕組み作りが課題になります。

このようにいくつかの課題が残されましたが、大会の質を保ちつつ、時代の要請や日本保育学会としての使命と方向性をふまえて大会を開催していくことが求められる時代になります。そのためには、新たな取組も積極的に導入し、そこで生じる一つひとつの課題を丁寧に検証し、改善していく作業が今以上に大切になると思います。

以上、簡単ではございますが大会報告を申し上げ、改めて皆様のご協力に心より感謝申し上げます。

課題研究委員会企画シンポジウム 遊びの質が高まる保育

—なぜ、遊びの質を考えなければならないのか—

村上 智子

本シンポジウムは、第64回大会の「質の高い遊びとは何か？—遊びの質を規定するための条件—」（『保育学研究』第49巻第3号を参照）に次いで「遊びの質」を追究するシンポジウムの第2弾であった。

まず、河邊貴子氏（聖心女子大学）より幼稚園の保育観察の事例をとおして遊びの質を問う視点が挙げられた。私なりに解釈すると以下の3つになった。①環境の質：子どもたちは環境を受けとめ環境に積極的にかかわるため、環境の質によって遊びの質が異なってくる。②環境へのかかわりの深まり：環境と子どもたちのかかわりは、環境の刺激を受けて変化し、子どもたちが環境にはたらきかけて変化する。そして、遊びのプロセスで環境と子どもたちのかかわりが深まっていくと遊びの質が高まっていく。③子どもの自己充実感の深まり：保育者が子どもの遊びのプロセスと環境との相互作用を理解して遊びを支えることによって、子どもの自己充実が深まり学びが大きくなる、すなわち、遊びの質が高くなる。

次に、永江敦美氏（西南女学院大学短期大学部附属シオン山幼稚園）より自園における保育の実践報告があった。その実践事例報告を受けて、原孝成氏（西南女学院大学短期大学部）は永江氏の遊びの質に対するイメージ分析の結果をもとに、保育者は遊びの質が高まることによって遊びだけではなく、生活全般におけるクラスの雰囲気や子ども自身の行動や子ども同士のかかわりなどの変化を重要な視点として受けとめており、「子どもたちの生活全般の変化」も遊びの質を評価する視点となるかを検討する必要があるとした。また、質の高い遊びには、遊びを見守り援助している保育者の視点やかかわりが重要である。保育者自身が遊びの質をどのように評価し、どのようにかかわれば遊びの質を高めていけるかという「保育者自身の問いかけ」が遊びの質を規定しているとの見解が示された。

次に、児嶋雅典氏（松山東雲短期大学）より「質」を問うとき、子どもたちと共に生活し子どもへの意図や願い（思い）を持って継続的にその育ちを見てきた保育者の視点が必要であり、子どもの育ちを「点」ではなく「線」で見る視点を持つことが重要であるとの話題提供がなされた。

最後に、大宮勇雄氏（福島大学）より、乳幼児期

においては豊かで複雑なものが日々の生活や遊びの中で育っており「質」を語ることは困難であるが、結果や説明の責任を課せられる現在、保育の分野においても「質」を語る必要性が高まっていることが「質」を問う理由として挙げられた。また、「SICS」「プロジェクト・スペクトラム」「学びの物語」という遊びに焦点を当てた3つのアセスメント・ツールの比較検討の報告がなされた。アセスメント・ツールとして必要な要素を私なりに解釈して主なものを挙げると、①「プロセスの質」を問うものであること、②日常の保育の中でアセスメントできるもの、③遊びの質を文脈性で捉えようとするもの、④遊びの質の向上に向けて保育者が自己評価できるものではないかと思う。

本シンポジウムで、遊びの質を考えるためのさまざまな幅広い視点を知ることができ、大変に有意義であった。

●Profile

村上 智子（むらかみ ともこ）

東北文教大学人間科学部子ども教育学科 講師

主な研究テーマは、乳幼児期の基本的生活習慣の獲得とその援助について。最近では、里山保育に関する研究を仲間と共同で進めている。フィールドワークによって保育現場の実践知と学術的知見を結びつけたいと考えている。

実行委員会企画保育セミナー1 人生の始めを支えるもの

—あなたの傍らに誰がいて、何を伝えるのか—

内村 真奈美

毎年参加している日本保育学会大会の楽しみは、基調講演やシンポジウムなどである。今回は、「人生の始めを支えるもの—あなたの傍らに誰がいて、何を伝えるのか—」という題目に惹かれ、実行委員会企画保育セミナー1に参加した。

大会プログラムの中に「家族との関わりの始まりを『出会い』と呼び、医者と患者、家族ではなく子ども、家族と私との出会いである」とあった。また、「人は人生の始まりを選ぶことができない」「出会いに二つの意味を込めている。感謝と恵みである」「家族との関わりの中心は『to do』何をしたかではなく、『to be』どのような関係を育んだか」など、興味深い文章が沢山書かれてあった。保育の現場も家族との出会い、子どもとの出会いから始まるので、共通するものがあると思いながらこのセミナーに参加した。

講師は北九州市立総合療育センターで歯科部長をされている歯科医師の武田康男先生である。問題を

抱える子どもと家族をどう支えていくのかということ、家族、子どもと出会い、家族と一緒にその子の人生を歩んできた実践を通して話された。

話の中で特に印象に残った1つが、口唇口蓋裂の子どもが生まれたときの話である。その子の祖父が「私の孫はいつ人になりますか」と尋ねた。先生が「子どもさんには名前がありますね。名前は一人ひとりを結びつける大切な意味があります。あのひとこの人は違うんだと、名前は人と人を分ける役割があります。お子さんには名前があります」と答えると、祖父は「すみませんでした」と一言だったそうである。この話の中に、子どもとの出会い、生まれたことへの祝福、人生は選べない、与えられた選びに答えること、これからの未来、希望など、1つの“家族”のあり方について、考えるべきことが沢山含まれていたように思う。

講師の話聞きながら、保育者として勤務している自分の保育の現場と重ね合わせてみた。子どもは保育園を選べない。保育園に入園したとき、「私たちはあなたのことを喜んで受け入れますよ」「あなたの人生に関わることができて感謝です。これからよろしくね」という出会いから始まるのではないだろうか。現在保育の現場では保護者に対する支援の必要性が大きくなってきている。保育者として、保護者との信頼関係を築きながら、その子の育ちにどのように関わっていけばいいのか。子どもと家族にとって、どのような関係を育んでいくことが必要なのかということに改めて考えさせられたセミナーだった。

今回のように、保育関係の研修会などではなかなか聞けないような内容に出合えるところに、日本保育学会大会に参加することの良さがあると思う。

●Profile

内村 真奈美 (うちむら まなみ)
鹿児島県霧島市安良保育園 主任保育士
特に3歳以上児の保育、子育て支援などに関わっている。現在、より良いカリキュラム作成についての共同研究を行っている。

自主シンポジウム14 実践を「開く」ことから生まれる 保育の省察と変容

本江 理子

大会発表要旨集の企画趣旨の冒頭は、「保育者の専門性の深まりや保育の質の向上のためには、個々の保育者が日々自らの実践を振り返り、そこでの子ども

の姿や出来事の意味を探求していく『省察』や、多様な他者とそれぞれのまなざしを交差しながら協働的に理解を深めていく『保育カンファレンス』は欠かすことのできないもの」という保育界ではすでに自明のことであろう命題から始まっていた。本シンポジウムは、この命題に関して、「開く」というキーワードでひも解いていこうとする試みであった。

初めに、司会者の三谷大紀氏（関東学院大学）から、企画の趣旨説明があった。対話の場を開くことには難しさとおもしろさがあり、それらのプロセスも一直線ではないが、そのことに迫っていきたいといった内容が丁寧に語られた。そして、シンポジウムを通して、子ども理解、同僚性、保育者の専門性の向上を再考する手がかりとしていく旨の確認があった。

話題提供者は3名。まずは、企画者でもある高嶋景子氏（田園調布学園大学）より、ビデオカンファレンスの実践を通じた保育者の変容過程から「子どもの姿を協働的にみていくことの意味」について語られた。新任保育者が「先生らしく」という枠組みにとらわれている初期段階から、先生らしくあるよりも子どものしていることに目を向けることの方が大切に感じられるようになってきた事例など、さまざまな変容過程を基に「実践を開く過程を支える『まなざし』の構造」を解き明かしていった。高嶋氏が保育者自身の背景や気持ちにも丁寧に寄りそったことで、実践を「開く」過程を支える重層的な場の構造に関して迫ることができたことが伝わってきた。

続いて、小林紀子氏（青山学院大学）より「『開く』ことが感染していくことの意味」について、Y市私立幼稚園協会主催の研究会での語り合いを基にした話題提供があった。さまざまな立場の保育者がさまざまな理由で「開く」ことができない様子を、さまざまな理論で解明していく内容に深く感銘した。停滞も失敗も含めて、葛藤しつつ、迷いつつ、「しかし、ここに意味がある」と信じて語り続ける「感染源」が存在することで「開く」ことが感染していくのではないかという。

もう1人の企画者でもある渡辺英則氏（港北幼稚園）は、「個々の保育者が保育の質を向上させるとは」と題し園長の立場からの提案を行った。本気度に差のある保育者への思いや「開く」ための環境作りなど、渡辺氏自身が本音をさらけ出して語ることで、より具体的に保育界の課題をクローズアップさせていった。

当初は、3者の提案内容が濃すぎて、フロアーの人々の中には、うまく処理できずにいる人もいるよ

うであった。しかし、指定討論者の野本茂夫氏（國學院大學）が、簡潔に要点を提示することで、見事に理解が促されていったように感じた。

今回の登壇者は、普段からよく語り合っている仲間であろうと推察する。仲間としての語り合いとその年月が、深い議論につながっていくことを改めて実感した。

●Profile

本江 理子（ほんごう りこ）
富山国際大学子ども育成学部 講師
学生や保育者の「子どもを見る視点の変容」に関心がある。単に「かわいい」ではなく、子どもの「おもしろさ」を専門的に語れるようになる過程を丁寧に見ていきたいと考えている。子どもたちの「その子らしさ」について語り合う時間を多く確保するため、園内研修会や気になる子の巡回など、保育現場に赴く時間を大切にしている。

自主シンポジウム17 保育者の実践研究を考える

— 専門性発達を促す技法としての実践研究 —

高橋 優子

保育者の実践研究は、プロフェッショナル・ディベロップメントという点からも大切だと言われている一方で、保育者にとっては、「研究は敷居が高い」「難しい」という声があるという。そこで、本シンポジウムでは、保育者にとって実践研究とは何か、について議論された。

松本紀子先生（品川区立西五反田保育園）は、園内研究の取り組みから、研究の目的に合わせ、既存の方法論に囚われず、目的にあった方法論を自分たちで模索しながらアプローチすることで、実践と研究が密につながり、保育者の意欲が向上していった事例を紹介された。

一方で、高山静子先生（浜松学院大学）は、保育者と研究者という両方を経験された立場から、研究の専門家ではない実践者にとって研究が負担になるようならば、保育実践者に実践報告を超えた研究を行うことは必要ではない。むしろ、再現性、普遍性のある理論を構築するのは研究者の仕事なのではないかと主張された。

それに対し、中坪史典先生（広島大学大学院）は、必要か不要かはそれぞれの本来実践者自身の自発的な判断によるものだが、中坪先生自身は、保育者にとって実践研究は重要であるという立場から、保育者の実践研究を支援する取り組みを紹介し、保育者は実践研究を通して、子どもの見方や保育を捉える視点の変化を体験することや無自覚だったことが自

覚化されること、漠然と感じていたことが裏付けられること等に面白さを感じていると述べられた。

3つの話題提供とその後のフロアを交えた議論では、保育実践には、研究的な眼差しが必要、実践研究は実践に寄与するものという共通認識がある一方、研究の捉え方に大きな違いが出ていた。指定討論の戸田雅美先生（東京家政大学）は、その議論の背景には、既存の方法論に則って行うものが研究であるというよりも、本来の研究目的が大切なのではないかという指摘がなされ、さらに議論が展開していった。

もちろん、方法論に則って行うことは大事だが、そればかりが重視される傾向があると、保育者の実践研究を難しくする理由の一つとなる。さらに、その難しさが招く先に、保育を実践するのは保育者の仕事、実践の理論構築は研究者の仕事というすみ分けが起こってしまうようにも感じられた。

しかし、私は、簡単にすみ分けられないような複雑さがあるように感じる。例えば、研究者が実践の場でアドバイスしたことで保育実践が変化すれば、実践に影響を与えることになり、その意味では実践をつくる一員となりうる。また、現在私は、保育現場で観察を重ねている。その中で、実践の当事者だからこそ描ける実践の中に埋め込まれた深みのある理論があるのではないかと感じるようになった。一方で、保育に関心を持ちながら実践の場を訪問する私から見えるものは、実践者とは違った視点があり、研究のアプローチも違ったものになるだろう。そういう意味において、保育の実践研究は、様々な立場から、また、必要に応じて工夫された方法によってなされることにより、幅が広がり、深みのあるものとなるのではないかと今回のシンポジウムに参加して考えた。

●Profile

高橋 優子（たかはし ゆうこ）
東京家政大学大学院 修士課程2年
子どもの主体性が大切にされる保育における保育者の援助、また園でどのような共通認識がなされているのかという視点に関心がある。

ポスター発表D-(3) 保育方法（保育方法論・保育形態・幼児理解）など1

上田 敏丈

本発表部会では、12のポスター発表があった。表題に方法論、保育形態、幼児理解と記載されていることからわかるように、保育実践に対する方法は

個々の園それぞれの数だけあるだろう。無数の保育方法から、相互に発表し合い、理解し合い、それを個々が持ち帰り、次の実践や研究に還元する…本部会の厚さと熱さを感じた。

本部会は多様な発表に彩られているが、大きく3つにわけられるのではないだろうか。

一つ目は、研究者による外からのまなざしによる丁寧な分析である。例えば「保育形態の多様性と質」では、グループサイズや保育者の比率・資格要件について、日本と諸外国との基準について報告されていた。今後、日本の保育の基準を再考していく上で重要な報告であった。

二つ目は、保育実践のアクション・リサーチ的な報告である。「豊かに表現する子どもの育成を通して」では、報告者の園におけるお楽しみ会での劇遊びの展開が報告されていた。また、「一時保育」や「コーナー保育」「自尊感情」を切り口とした実践報告があげられていた。

三つ目は、実践者が自らの実践をあるキーワードで読み解いていく報告である。本部会で最も考えさせられた部分であるので、少し詳しく見ていきたい。

いばばらこども園は、「生きる力」を実践のキーワードとし、自らの園での畑づくりや自然とのかかわりの中で、自分たちの卒園証書を自分たちが漉いて作っていること、その背後にある園長の保育に対す

る思いが報告されていた。

あさひおっけい保育園では、子ども達の「聴く力」を大事にしている。朝の会でのお話やラジオを通してのお話、自然の中の様々な音を聴くという実践の報告がなされ、実践の躍動感が感じられる報告であった。

幼稚園どんぐりころころでは、2歳児の「歩く力」をもとに日々の2時間の野外活動を報告している。さくら幼稚園では、幼児の姿を「全体性（幼児が対極的な見方をできるようにすること）」というキーワードで理解しようと試みていた。

保育を語る言葉は多様である。実践者が本部会のように「聴く力」や「全体性」といった豊かな言葉で自らの実践を語るとき、その背後にある実践の豊かさや、実践者の保育への思いが立ち現れてきたように感じた。そこからは実践に裏打ちされた言葉の強さを学ぶことができる。それと同時に、研究者である私ならば、この実践をどのような言葉で読み解くことができるのだろうか。改めて、考えさせられた部会であった。

●Profile

上田 敏丈 (うへだ はるとも)
名古屋市立大学大学院人間文化研究科 准教授
近年の研究テーマは、保育者の専門性。保育行為に関する研究、保育者の「見守る」に関する研究など。

■ 第67回大会開催(予告) ■

月 日：2014年5月17日(土)・18日(日)

会 場：大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学(大阪市東住吉区)

開催ブロック：近畿ブロック

<http://jsrec.or.jp/hoiku67/>

◆第67回大会研究発表申込みについて

参加申込み方法は、原則Web登録となります。事情によりWeb登録できない方については、申込書による郵送で受付けます。

※提出期日・提出物に不備がある場合は、受理できませんのでご注意ください。

※申込み用紙による発表申込み締切り期限は、Web登録と同じく2013年9月30日(月)[当日消印有効]です。

※発表申込みに際しては、本学会の大会研究発表に関する規程を遵守してください。大会終了後、審査の結果、違反があった場合は、発表取り消しのご連絡をする場合があります。日本保育学会倫理綱領に基づいた発表をお願いいたします。

◆未発表であること

発表時には、未発表であるものに限ります。発表申込み・要旨集原稿提出以降、発表前に他団体において印刷・公表された研究は、未発表になりませんので、ご注意ください。

詳しくは大会研究発表に関する規程第3条をご確認ください。

◆年度学会費の支払いについて

研究発表をおこなうには、筆頭発表者、連名発表者ともに、平成25年度学会費を2013年9月30日(月)までに納入済みであることが条件となります。未納者は発表できませんので、ご注意ください。

発表申込みをされた方が、年度学会費未納であっても、請求の連絡はいたしません。

◆自主シンポジウムについて

自主シンポジウムについては、連名登壇者が非会員である場合、その方の大会参加費は、筆頭登壇者が2013年10月21日(月)までに納入することを原則とします。納入がない場合は原稿を受理できません。

※20ページに手続きに関する注意点を記載しています。必ずご確認くださいませようお願いします。